

司馬遼太郎における帝国日本の原体験

——大阪外国語学校との関係を中心に——

王 海

Shiba Ryōtarō original experience
from the perspective of imperial Japan
From his relationship with Osaka Foreign School 大阪外国語学校

WANG Hai

It is widely believed that Shiba Ryōtarō made his first decision to learn Mongolian at Osaka Foreign School as major, because he was so interested at literature about the Nomads. In fact, Shiba was failed in the previous entrance exams for Osaka High School 大阪高等学校 and Hirosaki High School 弘前高等学校. After the 9.18 Incident and the establishment of Manchuria, more Japanese graduates were sent to work at Manchurian and Mongolian area, especially the Mongolian major students. After the frustration of the exams, it was possible for Shiba too, to dream to open a new life there. From those above, it is necessary to explore Shiba's motivation from the perspective of imperial Japan. Osaka Foreign Scholl was founded to enhance the economic communication with Asian continent at the beginning. However, with the proceedings of Japan imperialism, the school started to change its position to meet the needs for "North Expansion". Students and teachers actively participated in politics. They organized speeches, donations to support the war. Although Shiba didn't like the life in the camp, he wished to work at the secret service in Mongolia. We can see the obedience and resistance in the time from Shiba. Mongolian department published a magazine called "sakuhu". "sakuhu" was believed to inherited Oriental Studies. It demonstrates Asia history as the offense and defense between the cultivation and nomadism. Shiba was influenced by this view of history.

始めに——帝国日本という視座から司馬を再検討する可能性

司馬遼太郎（本名福田定一、1923-1996）はなぜ大阪外国語学校（以下は大阪外語と略す）の蒙古語部¹⁾を専攻として選んだのか。『司馬遼太郎事典』で紹介されるように、「彼の大陸への限りない憧れを終生持ち続けた」ことによるというのは主流的な見方と言えよう²⁾。これは1960年1月23日に掲載された彼のエッセイ「一枚の古銭」における「もし私の生命が戦いの後にまで生き続けられるならば、彼ら（興亡した騎馬民族と満洲民族、筆者注）の滅亡の一つ一つの主題を私なりにロマンの形で表現していきたい」という記述に依拠している³⁾。その一方、二日前の21日のイベント、すなわち司馬が人生初の大賞「直木賞」を授賞したことを考え合わせれば、「大陸への憧れ」という感慨は、当時新進作家としての司馬の志と気負いをそのまま伝えているだろう。その結果、翌年に彼は産経新聞を退社し、新聞記者から作家活動に専念するようになった。以上のような事実関係から、司馬が蒙古語学科を選んだのは、文学青年としての性格と無縁なものではないと考えられる。

それはたとえば、先輩作家である藤沢桓夫（1904-1989）への追悼文において、司馬は藤沢の小説『新雪』を読んだことが「大阪外語の志願票のなかで、モンゴル語科の上に○をつけた動機の九〇%」だと述べていることから分かる⁴⁾。確かに「九〇%」との意思表示は、亡くなった人に対する一種のリップサービスと考えられなくもないが、司馬が『新雪』を読んだということは事実であり、1941年から朝日新聞で連載されたこの恋愛物語

1) 「蒙古」は正しくは「モンゴル」だが、本稿は歴史的な用語として、「蒙古」、「蒙古語部」、「支那語部」、「支那」、「満蒙地域」と呼称する。

2) 『司馬遼太郎事典』志村有弘編（勉誠出版、2007）p316-317

3) 『司馬遼太郎が考えたこと1』「一枚の古銭」（新潮社、2001）p110

4) 山野博史『発掘司馬遼太郎』「藤沢桓夫」（文藝春秋、2001）p46、『新雪』は藤沢の叔父、東洋学者である石浜純太郎をモデルにし、モンゴル語学者の娘、弟子、教師、女医の恋愛物語である。

は、戦時中日本の軍国主義を大きく宣伝したものであることを見逃してはいけない。満州事変を境に、「報道」から「宣伝」の道具に豹変した朝日新聞⁵⁾に、「祖国日本の讃歌を斉唱する」、「今日のこの昂揚せる瞬間におけるわれわれの祖国に寄せる頌歌」と煽ったように、『新雪』自体も戦争から免れることができなかった⁶⁾。

もう一つの例を引いてみよう。1996年司馬は亡くなった時、クラスメートに以下のように当時のことを振り返り、「(蒙古語部は、筆者注) 前の年より受験者数も、入学者数も増えたのですが、それは満州の会社、満鉄や華北鉄道、あるいは特務機関に就職しやすくなるので選んだという人もいたかと思います。競争率は八倍ではなかったかと記憶しています」と述べている⁷⁾。すなわち司馬が敢えて難関な専攻と思われる蒙古語部を目指したのは、満蒙地域で就職しやすいだろうという動機があったかもしれないとの指摘である。ちなみに司馬は大阪外語蒙古語部を受験する前に、旧制大阪高等学校、さらに大阪から遠く離れた東北地方の弘前高等学校も受験しており、いずれも不合格だった。帝国大学の予備校と思われる旧制高等学校への幾度とない失敗から、国内のエリートへの道がもはや遠ざかっていくような、青年の司馬はそんな深刻な挫折感を覚えたに違いない。蒙古語部はかならずしも彼の第一選択だったとは考えにくいだが、蒙古語部に入り、満蒙地域に渡り、そこで新たな人生を拓こうとするのは司馬の本心ではないだろうか⁸⁾。いずれにせよ、以上の「新雪」、「就職」という二つの例から、

5) 朝日新聞が昭和時代の報道を自ら問い直しに、日米英から歴史家三人、入江昭、バラック・クシュナー、劉傑を招き、報道検証の成果や課題をシンポジウムで検討した。その文中に朝日新聞について、「分かれ目は満州事変」、「『報道』から『宣伝』に」などの議論は印象深い。2010年6月21日、朝刊。

6) 『東京朝日新聞』「次の朝刊小説」1941年11月18日

7) 津田陽「司馬さんの七十二年」『司馬遼太郎の世界』（文藝春秋、1996）p449

8) 司馬は1942年蒙古語部に入学したが、1941年年末の真珠湾攻撃およびマレー沖海戦をきっかけに、大阪外語馬來（マレー）語部には志願者が殺到し、競争率は23.1倍もあるという。『大阪外国語大学70年史』（大阪外国語大学70年史刊行会、1992）p524. にもかかわらず、司馬は蒙古語部を志願した。蒙古語部は彼の第一選択とは

ただ文学青年という以外に、司馬の蒙古語志望の背後にある帝国日本という周辺環境が大きく関わっていることが分かる。この場合はむしろ補完的と指摘したほうがより適切かもしれない。

本稿では司馬の蒙古語志向を再検討すると共に、帝国日本に包まれた大阪外語蒙古語部における司馬の学生生活を実証的に明らかにし、それが司馬の戦後作品といかなる関係にあるか考えてみたい。

1. 大阪外語の戦時体制への過程

1918年11月11日、コンピエーニュにおいてドイツ軍と連合軍との間に、休戦協定が成立することによって、第一次世界大戦（以下は一戦と略す）の戦争行為が終結した。四年後の同じ日に、大阪外語は開校式を行った。「世界をこめし戦雲ようやく霽れて…」と校歌が伝えるように、「終戦の開放感」および「万事につけて新機軸を打ち出し」といった感激は、だれもの胸に響いていた⁹⁾。もはや世界はこれから平和の道に入り、国家建設のため大量の人材が求められるなか、日本全土で官立・公立・私立専門学校が設立され、土木・繊維・林業・工業・商船・外事といったさまざまな分野で教育活動が盛んに行われるようになった。そのなか、大阪外語は東京外語と並び、二つしか存在しない官立外国語専門学校のひとつとして誕生した。

大阪外語の創立は、第一次大戦時に船成金として莫大な富を稼いだ林竹三郎の妻、林蝶子の百万円の寄付から発足する。開校式において、中目覚校長は「今や本校ハ東洋商工業ノ中心タル此地に創設セラレタリ抑々本校ハ国際的実務ニ従事スル者ヲ養成スル所ニシテ」と強調するように、大阪

言えなくても、『新雪』から感銘を覚え、蒙古に特別な感情を抱くようになったことは考えられる。

9) 開校日の設定および開校式当日の様子について、『大阪外国語大学70年史』を参照のこと。p23

外語ははじめから貿易・経済を中心に人材を育成する教育方針を採った。しかも、「東京外語が英、仏、独、露から始まる西洋語部のあとに支、蒙、泰、馬來などの東洋語部を配しているのに対し、大阪外語は東洋語部を先に置いて西洋語部をあとに配し、東洋語優先・重視の姿勢を打ち出す」¹⁰⁾。その背景に第一次世界大戦による西欧列強のアジアからの一時的撤退という条件のなかで、日本、あるいは関西資本は戦後の時代においてアジア市場に進出しようという経済的動機があった。このように、大阪外語は設立時から経済の面でアジア大陸と密接な関係があった。

経済中心の大阪外語が戦時体制へ傾斜する過程については、『大阪外国語大学70年史』に詳しい紹介があるので、以下重要な事件だけを列挙する。

- ①1931年4月、学則改正によって自由のシンボルとも見られた折襟背広の制服が詰襟に変わった。
- ②1935年4月から、兼修語は獨語から蒙古語に変わった。1939年支那語部増員、1941年露語部増員。
- ③1937年7月7日中戦争が勃発し、その後大阪外語でも最初の犠牲者が出た。翌年6月、戦死者を合祀するための「烈士之碑」の除幕式を行った。
- ④1938年「国家総動員法」により、大阪外語は同年から「勤労奉仕」が始まり、以後は恒久行事となった。
- ⑤1943年学徒徴集延期制度が廃止され、学徒出陣が始まった。
- ⑥修業年限短縮、戦時教育体制が強化され、1944年3月大阪外語は大阪外事専門学校と改められた¹¹⁾。

もちろん、大阪外語は早くから「馬來語部」を設置し、1941年12月の太平洋戦争勃発後は、「安南語」（ベトナム語）、「ビルマ科」を増設、帝国日本のいわゆる「南進政策」に加担した。その一方で、以上のプロセス全体

10) 同書 pp.13-14。開校当時、大阪外語は設置した学部が次の順に並ぶ。支那語部、蒙古語部、馬來語部、印度語部、英語部、佛語部、獨語部、露語部、西語部。

11) 同書 pp.64-68

を通して、見る限り、早期にアジア市場をターゲットにした大阪外語は、日本北進政策におけるアジア言語教育の「下士官養成」の重要な拠点として機能していたと言えよう。

当時十九歳であった司馬は、1942年4月大阪外語蒙古語部第21回生として入学、1943年11月仮卒業証書を授与され、12月幹部候補生として入営。1944年4月満州の四平戦車学校に入学し、12月見習士官として戦車第一連帯に配属。そして1945年栃木県佐野市で少尉として敗戦を迎えた¹²⁾。学徒出陣、修業短縮のため、司馬が大阪外語に在学した期間は一年七ヶ月しかない。しかし、大阪外語、とりわけ蒙古語部は積極的に政治に参加しており、青年の司馬に大きな影響を与えたことは間違いないと考えられる。

2. 「大陸雄飛」という時代

1929年ニューヨーク株式市場の大暴落で不況の風が吹き荒れ、日本は「国防の安全」と「国内の不況」を一挙に解決する手段として、1931年満州事変を起こし、翌年「満州国」を設立した。いわゆる「満蒙特殊権益」を完全に日本支配の下に置いたのである。それまで経済恐慌で就職難に悩まされた蒙古語部は「わが世の春」を謳歌するようになった。蒙古語部の入学および就職好調について、1943年大阪外語同窓会が発行した『会員名簿』と毎年出版した『大阪外国語学校一覧』を参照し、以下の表で示す¹³⁾。

12) 『司馬遼太郎について：裸眼の思索者』 山野博史編「司馬遼太郎年譜」(NHK 出版、2006) pp.175-176

13) 本表は1942年までのデータによって統計したものである。「大陸就職」とは、中国(「満州国」、「蒙疆政権」、「華北自治政権」を含む)、朝鮮で就職することである。また、中退者、転校者があるため、新入学人数と卒業者人数一致しない場合もある。『会員名簿』(大阪外国語学校同窓会本部、1943年) pp.33-43。毎年『大阪外国語学校一覧』(生徒)「卒業生」(楠屋印刷所、1922-1941)

	国内就職	大陸就職	入隊中	不明	新入学人数
第1回生	6	4			13
第4回生	7	5		3	22
第5回生	3	12	2		20
第7回生	3	6	1		11
第8回生	2	8			20
第9回生	2	6			14
第10回生	1	9		6	23
第11回生	6	13		1	20
第12回生	3	10	1	1	20
第13回生	1	12	1		19
第14回生	1	8		1	20
第15回生	2	9		6	20
第16回生		7	8		22
第17回生	4	6	3	2	23
第18回生		5	11		19
第19回生	1	7	11		20
第20回生	2	7		7	18
合計	44	124	38	27	324

1942年までのデータであるため、その年に入学した司馬の情報は反映されていない。とはいえこの表からは、司馬の先輩たちがどのように帝国日本と関わっていたかがうかがえる。

- ①第9回生（1930年）までは、入学人数は少なく、しかも断続的に募集を行っていたのに対して、満州事変が発生した1931年から、入学人数は大幅に増え、しかも毎年募集するようになった。
- ②「大陸就職」と「入隊」人数を合わせれば、大陸へ行く卒業生は統計できる総人数のなかで、七十九%を占める。つまり蒙古語部の卒業生は、ほとんど大陸へ進出した。
- ③さらに『会員名簿』によれば、「大陸就職」の多くは、中国における各「自治政権の政府機構」（満州、蒙疆）や特務機関で勤めていたことが

分かる。当時の流行語で言うと、帝国日本の進出は蒙古語部の学生たちにとって、まさに「大陸雄飛」の時代であった。

蒙古語部に入った司馬の場合、「大陸雄飛」とは、必ずしも兵隊として帝国日本「世界新秩序建設の指導的地位」のために戦場に立つものではない。当時、「馬賊」という満蒙地域で活躍していた私的な武装・強盗集団があり、日本ではむしろ「任侠的存在」として取り上げられ、馬賊を主題とする歌も流行っていたとされる¹⁴⁾。司馬は「馬賊」として「中央アジアを放浪したい、そして大蒙古の歴史、その滅び行く歴史がなんであったのかを見極めたい」と願っていたようだ¹⁵⁾。在学中の司馬に対して、当時のクラスメートは「戦争物は敬遠している」と証言し¹⁶⁾、司馬は入営しても、訓練に熱心ではなく、上官に殴られたり、「自分は軍人型ではない」と言い、みんなを驚かせたりしたという戦友の証言もある¹⁷⁾。司馬の軍隊嫌いはおそらく間違いないであろう。後に司馬の回想文によれば、在学中司馬は留学生試験を受けて、外務省で働きながら、文学創作に投身するという思惑から¹⁸⁾、青

14) 渡辺龍策『馬賊一日中戦争史の側面』（中公新書、1964）p25、45、澁谷由里『馬賊で見る「満洲」張作霖のあゆんだ道』（講談社選書メチエ、2004）司馬は当時山中峯太郎の冒険小説に憧れ、また馬賊に魅了することについて、延吉実『司馬遼太郎とその時代 戦中篇』「馬賊志願」、「夢のこと」（青弓社、2002年）pp.100-155を参照のこと。司馬自身も当時の流行唄「蒙古放浪歌」を愛唱していたと述べる。『司馬遼太郎全集47』p243

15) 『司馬遼太郎の世界』「司馬さんの七十二年」（文藝春秋、1996）p453

16) 原文は「当時は戦時下で、戦争映画が大勢を占めていた。（中略）福田（司馬）の志向は変わっていた。戦争物は敬遠している。洋画にも興味を示さない。邦画、それもほとんど時代物ばかりだった。忠臣蔵、太閤記、武蔵、大菩薩峠などである」杉本満「大阪外語の福田定一くん『朔風』1999年、p30

17) 原文は「輪をかけてというか、福田君自身、訓練に対して熱心ではありませんでした。きびきびした動作、勇敢であるという姿勢、あるいははりきっているという姿勢などが求められているわけですが、彼には見られなかった。『集合』という声がかかったりすると、いちばん後から来たのが福田くんで、上官からよく殴られていたものです」藤田庄一郎「司馬さんの七十二年」『司馬遼太郎の世界』（文藝春秋、1996）p453

18) 『司馬遼太郎が考えたこと』10「天山の麓の緑のなかで」p291、また、青年期司馬の文学志向について、杉本満の証言はあり、司馬自身も「外務省に32歳まで小説を書

年期の司馬は自分の将来に関して兵隊ではなく役人を目指したと考えられる。ここで、文学という夢を持って、時代と逆らいながら、なお帝国日本と一体化する青年期の司馬の姿がうかがえる。

3. 満蒙研究会と『朔風』

蒙古語部の生徒たちが学校でどのような影響をうけたのかについては、満州事変の延長線上に登場する大阪外語の満蒙研究会に言及しなければいけない。同会は1931年11月13日に創立され、「日本の国際舞台での孤立は国際連盟の日本および満州に対する認識不足」のため、「蒙古満州及び之に関係ある諸方面に関する研究調査」を目的とした学生団体である。文部省に「特ニ其ノ目的、主義、綱領等ニ於テ国家主義的立場ヲ標榜セリト認メラルルモノ」と評価され、また同会の「宣言書」、「大会主旨」から、満蒙研究会はいかに政治と積極的に組んでいたかが分かる¹⁹⁾。同会は戦地に関する連絡、募金、講演会、旅行といった活動を行うほか、機関誌『朔風』を発行した。戦前の『朔風』は1932年から1941年まで毎年刊行されたようで²⁰⁾、満蒙の民族、経済、文化、殖民、移民問題に関して、教員の論文と学生の感想が掲載された。

東洋学の大御所と言われる内藤湖南が『朔風』を題字した。同誌は東洋学の系譜を受け継ぐと期待されたと言えよう。『朔風』第一号における最初

き、それから外務省をやめるんだ」と記述する。「モンゴルの草原は人類の宝だ」「大阪外語の福田定一くん」『朔風』1999、p32.p44。そのほかに、戦友藤田庄一郎は司馬が「特務機関への配属を希望した」という。『ニッポン猪飼野ものがたり』（批評社、2011）p295

19) 満蒙研究会の成立経緯に関して、『大阪外国語大学70年校史』で詳しく載せられている。pp.53-56を参考のこと。

20) 『朔風』の発刊、停刊および戦後復刊について、内田孝氏「大阪外国語大学におけるモンゴル人教師」『内陸アジア史研究』19（2004,3）pp.43-64を参照のこと。なお、『朔風』第一号は1928年創刊と推定されているが、満蒙研究会は1931年末に成立されたことから、雑誌も1931年末に創刊された可能性がある。

の論文は、内藤の娘婿、京都帝国大学東洋史教授、当時非常勤として蒙古語を教えていた鴛淵一の論文である。

彼はこの論文において「爾來彼等（北方民族、筆者注）の中に興亡盛衰ありて幾多の民族が迭立したるも、其南下の勢は不斷の事にして常に南漢族と衝突を起し、政治史上南北二元の抗争を繰り返し來り。実に東洋史は此南北二元の不斷の争鬪史と云ふも過言に非ずして、之が基調となりて東洋四千年の歴史は構成せられ居る次第なり」と述べ、結論として「今回は主として政治史的に見たる方面の変遷を述べたるが、何れ機を見て、彼等北狄が支那の文化の發達に如何なる關係有りしか、即ち之に寄与する所ありや、或は単に破壊的のみにて何等貢獻する所無かりしや、と云ふ点を中心とし（中略）要するに滿蒙に起りし諸民族は其武的優勢を以て中原を押し、或は之が主人公となり、吾人として特に注意すべき所にして、真に北方蛮人の為に万丈の氣を吐くものと云ふべし」と結ぶ²¹⁾。

このような二元（遊牧・農耕）対立史観で、日本は遊牧民族の代弁者、あるいは味方として位置づけられる。一番先頭に立つ鴛淵一のこの論文は、戦前までの『朔風』に一貫した思想を先取りしたものである。もっと広く見れば、つまり明治中期から昭和初期まで、いわゆる京都学派の東洋史研究をはじめ、「モンゴル論」や「騎馬民族論」など、中国を相対化する議論は盛んに行われていた時代相でもあった²²⁾。『朔風』はこのような思想的流れを忠実に受け継いでいると思われる。

戦前最終号の『朔風』（1941年）における石飛豊三の論文を紹介しよう。石飛は「牧畜を以て生活の基本とし、農耕に社会的、経済的基礎を置く住民とはおよそ対蹠的な存在である」として、両者の矛盾を絶対視する。此

21) 『朔風』1932年創刊号、鴛淵一「滿蒙民族の史的回観」pp.1-10

22) たとえば1910年代内藤湖南は「支那は長い民族生活を維持して居ることの出来たのは、まったくこの外種族の侵入に因るものである」と述べる。「新支那論」『内藤湖南全集』第五卷、pp.513-514、戦中期、内藤の弟子である宮崎市定は『東洋に於ける素朴主義の民族と文明主義の社会』を發表し、東アジアにおける文明主義（漢民族）と素朴主義（遊牧民族）の相克しあう歴史を描く。（平凡社東洋文庫、1989）

の上に、清朝における蒙古独立運動の根本原因を、経済的野心による漢人の土地の蚕食に帰結する。漢人の拡張のため、生存空間を喪失しつつ「良質」、「重要」な遊牧民族は、「未開野蛮な民族として取り扱ふ事は許されない」と主張する。以上の『朔風』の首尾各一篇の論文が反映するように、『朔風』において、蒙古族は漢民族の拡張による被害者として描かれ、その上で日本は「最新科学」の代表として、対蒙古「援助論」を進めるべきだとの論が成立する²³⁾。当時の蒙古語部学生たち、さらに大阪外語も、このような雰囲気の中で教育されたと考えられる。

司馬は1942年4月蒙古語部に入学したが、その時点で戦時統制経済がよいよ強まり、紙さえも簡単に入手できなかつたためか、『朔風』雑誌は1942年まで停刊してしまった。もし『朔風』は1942年まで続いたとしたら、文学青年の司馬もなんらかの感想を雑誌に投稿したのかもしれない。『朔風』の読書歴について、司馬は直接に言及したことはないが、1941年の雑誌は当時大阪外語の図書室にあったわけで、読書家の司馬が石飛の論文を読んだ可能性も高いと推察できる²⁴⁾。したがって、司馬は戦後多数のモンゴル題材の小説やエッセイを残し、そのモンゴル観は常に変化すると指摘されるものの、『朔風』に反映された遊牧・農耕二元対立といった歴史的叙述は、司馬の作品において多く散見され、彼の思想を一貫していたと言えよう²⁵⁾。

23) 『朔風』1941年第十号、石飛豊三「明代に於けるオルドスの地位より見たる蒙古民族への一考察」pp.31-37。「即ち其の樂觀的所以は、蒙古の農牧に対して、最もよく地理環境に即応せる最新科学の注入に依り、その発展的役割が希望のもとに約束されて居ることである」

24) そのほか、戦後司馬は『朔風』の発刊基金に寄付したことがあり、雑誌の創設者、蒙古語部教授楠松源一との親交関係もあるということから、司馬は戦前期の『朔風』を読んだと考えても自然であろう。『朔風』1996、p147、『司馬遼太郎全集』第47巻、「モンゴル紀行」pp205-206（文芸春秋、1984）

25) 筆者は年代、作品順で司馬のモンゴル題材作品における関連記述を付表でまとめる。本文の後を参照のこと。

4. 「日蒙親善」²⁶⁾ とエルデムバーテル教師

二十世紀三四十年代、関東軍の内モンゴル工作は周知のことである²⁷⁾。戦時中、国際的、また地域的複雑な力関係で、三十年代内蒙古独立運動の指導者徳王（1902-1966）は次第に蒋介石と疎遠になり、日本の力を利用して実力を備えようと考えた。徳王をはじめ、「蒙疆政府代表团」は1938年10月から11月にかけて日本を訪れ、多くの日本政治家、軍関係者と面会し、より一層の「日蒙親善」を図ろうとした。11月8日に、徳王は大阪外語を訪問し、満蒙工作の犠牲となった人々を祭る「烈士之碑」も参拝した²⁸⁾。大阪外語は当時の「日蒙親善外交」との関係性が分かる。

このような背景に、モンゴル人エルデムバーテル（1914年-？）は大阪外語蒙古語科第三任外国人教師として招聘された。在職期間は1939年9月から1943年3月であった。彼の赴任をめぐって、「昔は蔣の『愛弟子』、いま日本の学園に、“恩人” 徳王を待つ蒙古青年」と当時の新聞に報道されるように、エルデムバーテルは内蒙古独立運動を支持し、しかも錯綜した政治的力関係の中に周旋する知識人であることが分かる²⁹⁾。エルデムバーテルの思想を理解する好材料として、長文だが彼が1940年『朔風』に寄稿した

26) ここでいう「日蒙」は、中華民国における内モンゴルと日本との特殊関係である。1921年に成立した社会主義モンゴル国はあるが、本稿は歴史的用語として、「日蒙関係」、「日蒙親善」といった呼称を援用する。

27) 戦前、戦中期の日蒙関係および関東軍工作について、波多野勝『満蒙独立運動』（PHP 新書、2001）、森久男『日本陸軍と内蒙工作 関東軍はなぜ独走したか』（講談社選書メチエ、2009）などを参照のこと。

28) 「国際文化論集」イリナ「徳王の訪日と日本の内モンゴル政策について」2004年12月p98。それによれば、徳王は1938年1941年二度わたって大阪外語を訪れたことがある。ちなみに蒙古語部に入学した司馬も、1942年の「蒙疆政府代表团」を接待する通訳として、観光案内に参加したようだ。『司馬遼太郎が考えたこと2』「わが辞書遍歴」p246（新潮社、2001）

29) エルデムバーテルおよび大阪外語のモンゴル人教師について、現滋賀県立大学非常勤教師の内田孝氏は詳しい検証がある。「内陸アジア史研究」（2004.1）「大阪外国語大学におけるモンゴル人教師」また、朝日新聞1941年2月26日掲載されたこの記事も、同氏のご教示によるものである。

モンゴル語の巻頭言「吾が所思」を翻訳して紹介する。

千九百四十年二月二十八日

人間は生きるうえで自らの身を処すべきで、その道義は善因善果にあると私は思っている。これは種蒔きに苦勞する春が過ぎて実る秋に近づくことに共通するのだ。

仏教の經典の説く通り、人を助ける場合、器物、金銭や真珠などで心を修めることこそ善になる。それと同様に、寛容さや知識で人を潤せば人が平等になれる。一方、人を騙してその利益を損うのは己の身を滅ぼすことになる。

最初の頃、我が蒙古人は大清国及び漢人に圧迫され逆境に追い込まれていた。そうした苦難をなめた後、我が同胞はばらばらになって世界各地に分散した。

だが、近年以来我が国内蒙古では、仏教の上層部や地元の豪族をはじめ、有識者らは建国の志を抱いている。そのため彼らは社団を広く設け、悪漢を絶ち、宗族を興し、明るき政治を創るつもりで、さらに盟友となる日本の援助を受けながら時機に備え、全蒙古を統一して東アジア新秩序を確立することを目指している。その発展ぶりはまるで夢のようだ。

また、我が民族の力では蒙古の状況は改善できるに間違いなく、我々は内外（注：中国と外国）の状況を明らかにすればよい。特に日本とモンゴルの状況が重要なのだ。

さらに余談だが、私は若くて浅学非才の身のまま、盛島先生のご推薦と多くの友人のご配慮をいただき、本校の蒙古語教師となった。日本に来てから、私は蒙古語教育に携わることから日本の発達した文明を受け入れ、将来の目標のために力を蓄え、また国のために力を注ぐことを心掛けています。

最後に、私は諸先生と友人のご配慮に改めて感謝しつつ、これからも皆様のご意見とご配慮をいただけることを願っている。

以上は『朔風』の掲載で、北国の蒙古がもっと自由に、世界が一日も早く平和になることを祈る³⁰⁾。

要するに、エルデムバーテルは「日蒙親善」、「漢族排斥」、「汎蒙古主義」といった理念に貫いた民族自決論者、知識人である。当時二十代のエルデムバーテルは若き司馬に蒙古語を教えていた³¹⁾。司馬はこのようにエルデムバーテル教師を記憶している。

モンゴル人の先生は、まだ二十代だったように思う。ジンギス汗とその一族の末裔で構成されている内蒙古の貴族出身で、パオの暖房がいかに暖かいかと言い、日本にきて家屋の寒さにおどろいた、おかげで腎臓病になった、といたりした。アメリカのどこかの大学に留学していた人で、当時、太平洋戦争の真っ最中だったが、たとえば「フォードのエンジンの音の静かなあの力強さは現代文明の象徴である」といって、やや軽薄な仕草ではあったが、エンジン音を上手に口まねした。この草原出身の知識人にとって、もっとも好ましいものは草原のパオであり、それと同格の位置にアメリカのフォード社の車が横たわっている。よくないのは家屋をはじめとする日本のすべてのようで、それ以上に好まないのは、口にこそ出さなかったが、漢民族のようで

30) 『朔風』1940年第十号「吾が所思」。また、「盛島」とは当時滿蒙地域特務機関で勤める盛島角房を指すだろう。盛島について『朔風』1938年第七号 p48を参照。

31) 『大阪外国語学校一覽』によれば、昭和18年度の講師陣は次の通りである。蒙古語（精松源一、鄂爾敦巴圖魯「エルデムバーテルのこと」）、中国語（山本磯治、吉野美弥雅、金子二郎、小田信秀、関恩福）。また同級生は「みんなウルトム先生が好きだった、しかし、この楽しい授業は一年間しか続かなかった」と証言し、司馬自身も何度も教師エルデムバーテルのことに触れたことがあるから、エルデムバーテルと司馬の関係は確定できる。『朔風』1999、pp25-26、『草原の記』pp21-22

あった。

「あの漢字！」

と、アメリカ人のように肩をすくめ、舌を鳴らした。あれは文字ではなくアリの行列です、見ているだけでも頭が痛くなります、といったが、そういう表現のなかに中国文化と漢民族への拒絶をにおわせている感じがした。私は年少のころ、こういうひとびとを通じて、中国とその周辺、あるいは中国史という大きい民族のつぼを考えるようになった。というより、モンゴル語の学習時間が長いため、どうしてもモンゴルという、日本語でその後流行語になった「辺疆」へ気持がかたより、その場所から漢民族とその居住地帯を見るようになった。辺疆といっても、そとにいるモンゴル人にはそういう片隔の意識はない。かれらは十分にその遊牧生活のなかで自己完結しており、人口的には少数民族ながら自分たちをゆるぎもなく世界の大家族だと思っているために、その後の日本語の辺疆の語感の、なかにある劣弱感、被害者意識、あるいは怨恨といったような要素はモンゴル人やモンゴル語に希薄で、それへ身をよせてもおおらかな気分であることができた。ともかくも蒙古高原からはるかに漢民族の農耕文明を見るという視点を最初にあたえてくれたモンゴルという世界への感謝は、多少は私のなかにある³²⁾。

三十年経っても、授業の風景はなお司馬に鮮明に覚えられていた。蒙古への愛情、「中国文化と漢民族への拒絶」、「辺疆」からの視点、それまで漢学に接触していた青年期の司馬は³³⁾、新たな立場と歴史の組み合わせに出会った。その時の彼の思想的な衝撃は考えられよう。ただ、このような原体

32) 『司馬遼太郎全集』「対談 中国を考える」（文藝春秋、1984年）pp.484-485

33) 司馬の父福田是定は薬剤師だが、幼少のころに四書五経を習っていた。司馬も幼少の頃漢学の素読を受けていたという。また、大学入試のとき、早稲田の支那文学科に進学したかったという。『司馬遼太郎事典』pp262-263、p324、p370

験は戦中期東アジアにおける混乱な政治局面と帝国日本の支配に裏付けられることを、忘れてはいけない。帝国日本支配下の大阪外語蒙古学部の一青年として、司馬も例外なくその時代の渦巻きに呑み込まれたことは間違いないだろう。

終わりに

筆者は、いままでの実証を重ねた結果、大阪外語蒙古語部は積極的に帝国日本に関わったことを理解できた。その上、当時東洋史研究の基本的な観点である遊牧・農耕二元対立史観といった学術的な背景と、「日蒙親善外交」、「蒙古独立運動」といった政治的な背景を提示し、それらが戦後司馬の作品の底流となることを指摘した。このように司馬は学生時代の原体験は帝国日本に裏付けられたことが分かる。

ところが、先ほど司馬の蒙古人教師に対する記憶を引用したが、この記述は百パーセント歴史史料として信用できるかどうかは実に疑わしいものである。まず、「自己完結」と評価した遊牧生活は、当時帝国日本「最新科学」の支配と結びつけられない。それはむしろ戦後における梅棹忠夫との交友関係から得られた新たな認識ではないかと推測する³⁴⁾。次に、司馬は少年の頃、「中国史という大きい民族のるつぽを考える」というような抜群な思考力を果たして持っていたのだろうか。詳細にこだわった文章の前半と、やや抽象的に語る後半を比べて、三十年という大きな思想的な断裂層が存在するように感じざるをえない。そこが小説家としての整合力が存在するわけだし、逆にそれこそ、司馬は個人史として、その思想が変化していく

34) 梅棹忠夫(1920-2010)日本の生態学者、民族学者である。モンゴルの遊牧民と家畜群の研究を基盤に、生物地理学的な歴史観をしめした『文明の生態史観』(中央公論、1957)は、戦後日本社会に大きな反響を及ぼした。『日本文化論』の変容—戦後日本の文化とアイデンティティー』(中央公論社、1990)なお、司馬と梅棹との交友関係について、今後の課題として展開していきたい。

鍵が潜んでいるのではないかと思う。

付表：司馬のモンゴル題材作品における農耕・遊牧対立に関する記述

作品、初出、出典	引用
<p>「戈壁の匈奴」初出1957.5 『司馬遼太郎短編小説総集』（講談社、1971）p10</p>	<p>ここに棲む騎馬民族が、南の豊穡と色彩に寄せる夢はわれわれ農耕民族の子孫達の想像を絶するものがあつた。シナ五千年の歴史は、一つの角度から見れば、この夢をいだいて南下してくる塞外の蛮族と、中原の稔と文化をままろうとする農耕民族との、人口の擦りへらしあいであつたとも云えるのである</p>
<p>「東夷北狄と農耕中国二千年」、初出1974.8 『司馬遼太郎全集』第46巻（文芸春秋、1984）p378</p>	<p>このあたり（張家口、筆者注）は清朝以前から中国人との交易地帯だよ。だけど、農耕漢民族がどんどんそのへんを耕していくわけ。そうしたら遊牧民らは、おれが冬ここにおつたのに、夏きてみるともう畑になっていると言って怒るわけだ。なにせ土地が広いからまた別の牧草のあるところへ行く。はじめのうちはこうしてほかに行っていたけれども、しまいには怒りが昂じてきて、漢民族の領域に武力で押し入る。こういう関係が繰り返されている</p>
<p>「遊牧文化と古朝鮮」初出1982、1 『司馬遼太郎の世界』（文芸春秋、1996）p297</p>	<p>要するに十三世紀から二十世紀まで続いた、その間にむろん明が入りますが、この二つの征服王朝（元朝、清朝、筆者注）が中国の領土をひろげたといえます。異民族による征服王朝がせつせと中国領をひろげてやがて滅んでゆき、いまは中国内部の少数民族になっているというのは、他の国の歴史ではありえないのではないかと思います。</p>
<p>「モンゴル、「文明」と「文化」のいま」（開高健との対談）初出1988、1 『対談集 東と西』（朝日新聞社、1990）p29</p>	<p>何にしても、唐がらしというのは地面を掘って植えなければならぬ。植えるということは土をいじらんならぬ。岩村忍さんによると、モンゴル人は土をひっかくようなことをしたら自分が墜落する、と考えている。モンゴル人が中国人つまり農耕者に対して持つ軽蔑感というのは、土をひっかいているということです。自分たちは馬の上に乗っている。</p>
<p>「馬上の精神—モンゴル素描」初出1990、12 『司馬遼太郎が考えたこと15』p42（新潮社、2002）</p>	<p>草原の民族が、基本的に農業民族をきらうのは、一つにはそういう破壊性である。遊牧は自給自足といったが、すこしは交易しなければならぬ。絹と穀物（わずかでよかった）において欠けているのである。ただ、古代、貨幣経済が匈奴におよんでいなかったため、農業帝国中国とのあいだでなめらかなには交易できず、ときに略奪した。が、歴史がすすむとともに両者に交易のルールができた。</p>
<p>「匈奴」初出1993 『草原の記』（新潮文庫、1996）pp19-20</p>	<p>まして、一部族が、冬の草原として決めていたものを、秋が過ぎ、はるかに移動してきて、そこがすでに漢民族によって耕されたりすると、武力で駆逐せざるをえない。ついでに収穫物を没収した。匈奴と農民は、天を異にしているのである。</p>

注：この表では、初期の作品から晩年の作品を取り上げ、司馬のモンゴル観あるいは遊牧民族観は時代によって変化があつても、農耕・遊牧二元対立史観は司馬生涯を一貫する思想的な特徴であることが分かる。紙幅の関係上、多くの引用を省くが、実は『司馬遼太郎が考えたこと』、『司馬遼太郎対話選集』『司馬遼太郎が語る日本』においても似たような表現が多く見られる。なお、初出に関して、『司馬遼太郎書誌研究文献目録』（勉誠出版、2004）を参照する。